『虚無感を超えて』　2026 年 01 月 18 日

岩波の月刊誌『世界』の「読者談話室」に私の投稿が掲載されたので、転載したい。『世界』には、格調高い立派な論文や論考が掲載されているが、現実の世界は真逆に動いているように見え、『世界』の編集者、論者たち、多くの読者はどう受け止めているかを、問うたものである。今の時代、言葉の力があまりになくなっていることへの失望は深い。

世界 SEKAI 2026.02

読者談話室

虚無感を超えて

秋吉隆雄

「世界」の創刊一〇〇〇号を記念した特集「私たちはどう生きてきたか」を、殊に、若い世代の声《これからの世界》を興味深く読んだ。

私は三〇代から「世界」を読み始め、五〇年以上愛読している。その中で、「韓国からの通信」は記憶に深く留まっている。T・K生の筆名で、一九七三年から一九八八年まで、軍事政権に命を賭して、立ち向かう民主化運動の闘いに衝撃を受けた。毎月待ちわび、貪り読んだ。

ある神学校で、池明観先生の講義を受けていた時、「韓国軍事政府はT・K生を血眼になって探しているでしょうね」と聞いた。先生はただニコニコ笑っておられた。後に、T・K生は池明観先生ご自身であったことを知り、驚きとともに、納得した。

「韓国からの通信」は韓国の民主化の原点を醸成した闘いのリポートであった。軍政下の民主化闘争を世界に発信するために、人々の血のにじむ協力があった。苛烈な闘いを貫き通した人々と、「通信」を発信させた人々のことを思うと、ただ敬服する。

「世界」を読み、時代の出来事に対する分析と認識を学んだ。そして、将来の展望も示唆されてきた。「世界」は眼を開かせてくれる知識の宝庫であった。

しかし、現実社会の状況は、「世界」で論じられている論考とは真逆なことが起こっているのではないかと、思わざるを得ない。読者の皆さんはどう受け止めておられるか。

沖縄の辺野古新基地問題、集団的自衛権を行使できる安保法、福島原発事故など、「世界」で幾多の誠実な論考が展開された。ところが、辺野古新基地は建設に向かい、安保法は憲法違反という声はかき消され、原発は再稼働から新設まで、取り沙汰されている。「世界」は知性の声を発してきたが、現実は、大学への干渉を含め、諸々が政府の思惑どおりに進んでいる。言葉は空に向かい、現実を変革する力にはなっていない。読む度に、そういう虚無感に襲われている。言葉が人権を守り、平和を生み出す力になることを切望している。

（横浜市港南区・84歳・牧師）

私は、自分の意見を表わす場合、必ず「牧師」と書く。隠退しているが、牧師として、キリストに生かされ、福音に生きる者であることを証ししたいからである。